

## 新築戸建て住宅のホルムアルデヒド濃度実態調査

○米田奈穂子 大村道雄 (信州大学)

**目的】**近年、建材・内装材や防殺虫剤等から発生する化学物質による室内空気汚染が問題となっている。特にホルムアルデヒド(HCHO)汚染が深刻な状況で、健康被害例も少なくない。ノンホルムアルデヒド建材の登場などで改善されることが期待されるが、住宅建設に如何に反映されているかの実態は明らかでない。前回、新築集合住宅の実態調査を報告したが、今回、H12年になってから夏までに新築された戸建て住戸を対象として室内空気中HCHO濃度の実態を把握し、居住者の健康を守るための方策を探ることを目的として実施した秋期、冬期の測定結果を報告する。

**方法】**長野市内でH12年前半に新築された住宅の入居者に予備調査を行い、入居後何らかの症状を訴えている家族の中から協力が得られた9軒の住戸を対象に、10月及び12月末から1月にかけての2回、各住戸の居間を対象としてHCHO濃度を温湿度とを測定した。HCHO濃度の測定は、柴田科学パッシブガスタンブを24時間放置した後、AHMT吸光光度法で行った。温湿度の測定にはタバイエスペックのサーモレコーダーRS-10を使用した。

**結果】**入居時の各住戸の居間におけるHCHO濃度は秋期において0.008~0.027ppmの間で、厚生省のガイドライン値に比べてかなり低い値であった。各住戸で暖房器具を使用していた冬期の測定結果では、0.008~0.023ppmの間に留まった。暖房使用中であったにもかかわらず、居間の温度は秋期の温度より低い傾向が見られたことが主な原因と思われた。HCHO濃度が、ガイドライン未満であっても、化学物質過敏症特有の症状が改善されないと思われるので、測定値のみを根拠に判断することは、住人の健康と生命を守ることに十分なことを指摘することができる。